

被爆76周年原水爆禁止世界大会広島大会の閉会行事が8月6日、広島県民文化センターで行われ、オンラインで配信されました。

第21代高校生平和大使の開原弓喜さんの司会で進められ、黙とうの後、金子哲夫実行委員会共同実行委員長の主催者あいさつがありました。

金子さんは、平和祈念式典に出席し発言されたなかで、菅義偉首相ただ一人が核兵器禁止条約に触れなかったことを、被爆者の願いを踏みにじるものであり、式典に参加する資格はないと批判。また、東京で開催されているオリンピックで、8月6日8時15分、全アスリート、参加関係者に黙とうすることをIOCに求めているにもかかわらず、それを拒否されていたことを明かしました。平和を理念とするオリンピックに参加する人たちに、原爆のことを知らしめる意味があると考えられるが、そうした機会を奪ったIOCの対応は、政治的な意味を持つものとして、オリンピックの開催が厳しく問われるものとなると訴えました。

また、今大会はコロナ禍の中で、昨年に引き続き開催形態を大きく変更せざるを得ませんでした。分科会の講演などで若い世代の方々を取り入れ、次世代への継承を意識した大会になったことを評価し、広島だけのとりくみではなく、原発の問題など各地域でのとりくみがこれまでの原水禁運動の前進につながっており、今後も地域、職場、みなさんの声を充実させていくことに期待しますとまとめました。

続いて、4つの分科会のまとめ報告があり、第1分科会「核保有国と核保有を望む国、日本との関係」は宮島正明さん（佐賀）、第2分科会「気候変動と脱原発、自然エネルギーの今とこれから」を西部真紀子さん（北海道）、第3分科会「在外被爆者と日本の戦争責任、その歴史認識問題について」を中川理恵さん（社青同）、第4分科会「見て、聞いて、学ぼうヒロシマ」を千葉聡美さん（日教組）が、それぞれ報告しました。全体の総括を北村智之実行委員会事務局長がおこない、一人ひとりの命の尊厳を守り、核も戦争もない平和な世界に向け、参加者一同確認できた分科会となったとまとめました。

そして、廣中奈美さん（自治労広島）がヒロシマアピールを読み上げ、採択されたのち、佐古正明実行委員代表委員が、コロナ禍の世界大会で制約はあったものの、多くの方々の努力で成功裏に広島大会を終えることができたことを感謝すると閉会のあいさつを行い、広島大会は閉幕しました。